

父への思い綴る

第43回南日本作文コンクールで伊唐小学校6年（受賞時）の村川北斗君が個人の最高賞となる特別賞に輝きました。学校賞では同校が奨励賞を受賞しました。村川君の作品を紹介します。

もじやこ漁の詩



伊唐小6年
村川 北斗

父は海に生きる漁師だ。普段は海にもぐって、なまこやあわびなどを取っている。四月から五月にかけては、ぶりのち魚、もじやこを取りに北斗丸で遠く外海に出かける。六月になって、そんな元気な父の顔の右半分が急に動かなくなった。思うように話すことができない。医師から海の仕事を止められてからは、家でテレビをぼんやり見る日が続いた。父が病をかかえた六月に、もじやこ取りの様子を作文に書いた。父が肩ごしに原こう用紙をつらそうにしてのぞきこむ。

「あん時。こしきまで。行ったのう。」父は一語一語をたどるようにして話す。「中学生になったら、魚を選んだり、竹を上げたりするから。連れて行ってな、おとう。」父は答えず目じりをふるわせて、気まずそうに下を向いた。海で働く父とは別人のようだ。海の仕事の楽しさと厳しさを教えてくれた父の姿とつい比べてしまう。あの日の父を思

い出すと、えん筆が自然と動く。「『さっさかっぱに着がえて、準備ばせろ。』家では聞いたことのない激しい父の声だ。二階のデッキにいる父は、足を大きく開き、右足でかじをとりながら、船の外に身を乗り出す。ぼくは何をすればよいかかわらない。父が仁王様のように顔を真っ赤にした。『ないばしよっか。あみを早よ準備せい。』父は、水面にういているもに向かっかじをゆっくりに切っている。あと十メートル、五メートル。もが近づく。船が停まる。父は足でかじを操りながら目をこらしてあみ先を見ている。船が受ける波の音とエンジン音にも負けずに、父の声は海の上にひびく。左手でもじやこの群れを指さす。手を大きくふり上げる。あみ上げた。父は漁を知りつくしている。」

話し好きの父が、外にほとんど出なくなつた。朗らかな父が笑わなくなつた。右目はつり上がったままだ。ぼくと兄は、父の顔の話をしないようにした。七月に入って少しづつ、その右目が下がってきた。「北斗、お前も治つてきたと思うとや。」久しぶりに父の声がはずむ。スパーマーケットにいっしょに父は行くようになった。米ぶくろを持った父の顔がゆがんだ。思わず、その手

にあるぶくろをつかんだ。なんだという顔をした後、父はぎこちない笑みを見せた。「一人で持つつとや。子どもには重かど。」ぼくは、米の重さを少しも感じなかった。九月に、作文「もじやこ漁」が伊唐ミュージカルとなって発表されることを知った。作文をもとにした歌も作られた。漁の前夜の心の動きを十一月に一人で歌う。「おとうと行ったもじやこ漁が劇になるよ。」「ほう、いっしょに行ったあん時のことばや。」父の両ほが少しほほえみでふくらんだ。「もじやこ漁の夜」の歌を海の父の姿をはげみに練習する。高音の続く一小節「遠くはなれた知らない海に」を何度も練習する。のどがビリビリとふるえる。海いっばいにひびく、潮風でできた父の声を思い出す。二人つきりて父とながめたおだやかな海がよみがえる。胸いっばいに息を吸い込む。結び「あみを投げ込むもじやこ漁」を一気に歌い上げようとするが、息が最後まで続かない。顔を真っ赤にして仁王様のようにあみを投げ入れた父の姿が、途切れようとすると息を続けさせる。父ともう一度もじやこ漁に出たいと思うと、自然に腹に力がこもる。シャツ

にまだらに地図をえがく汗、潮のかおりとディーゼルのおい、あみいっばいのもじやこを目にした喜びの声、その一つ一つが父の姿と重なり、歌い続ける力をほくにくれる。潮の流れを確かめるように、父はだまつてぼくを見守っている。

ミュージカルが始まった。二百人をこえる観客が体育館をぎっしりとうめた。「もじやこ漁の夜」の前奏が聞こえてくる。北斗丸の甲板を洗うバケツを持つ。ぼくのミュージカルが始まる。父の姿を見つめる。客席の中ほどに、しらが交じりのぼうず頭がはつきりと見える。ぶ台の一番前でまっすぐ父を見て歌う。父もぼくから目をはなさない。まばたきもせずに聞いている。父しか見えなくなった。「かすかにゆれる北斗丸」と静かに歌う。父と二人のあの夜のように。歌い終わると、父はそっと目をふせた。周りの人が父の肩に手をおいた。父は、これ以上できないというほどに顔をくしゃくしゃにした。

冬の伊唐の海に父と出る。力強い、張りつめた父の声が北斗丸を満たす。「大きななまこを取るで、船で待つとけ。」海の中に父が姿を消す。来春の父との約束を確かめるように、あの歌をぼくは口ずさむ。「夢をみつけた おとうの海に あみを投げこむ もじやこ漁。」おとうは海に帰ってきた。